

Editorial

和温療法：21世紀の革新的医療へ

鄭 忠和

日温気物医誌第71巻 1 号 2007年11月 第 1 号：1-2

日本温泉気候物理医学会

Editorial

和温療法：21世紀の革新的医療へ

鄭 忠和

Chuwa TEI

日本が世界最長寿国であることは医療従事者として誇るべきことであろう。この実現は国民皆保険制度と医療従事者の献身的な尽力なしには到達できなかったと思われる。特に先進医療技術を国民皆保険制度の下で誰でも容易に安価に受けられる医療環境を提供してきたことは、医療を受ける国民にとっては大変有難くすばらしいことであった。しかしこのような医療環境を維持できた背景には、欧米に比べて医師・専門医らの技術料を非常に低く抑えてきた事実があることを忘れてはならない。

一方、全国どこでも手軽に得られる温泉、緑、海洋、温暖な気候など恵まれた自然環境も世界最長寿国に到達できた原因の一つと思われる。日本人ほど温泉を好み、自宅でお風呂を楽しむ習慣を日常生活に取り入れている国民は他にいない。

世界最長寿国となり、高齢者が長生きして本当に良かったと感じられる社会であって欲しいものである。しかし、お年寄りの中には身体が不自由になり、介護が必要であるにもかかわらず十分なケアを受けられずに、早く死にたいと感じている方もいるようである。是非このような方が一人もいない高齢化社会をめざすべきであろう。質の高い医療を維持するためには十分な予算が必要である。しかし、国家予算、医療予算には限界がある。効率的に医療の質を維持するためには医療価値（＝医療効果/コスト）を適正に評価する必要がある。効率的な医療の開発・展開が必要である。医療価値（＝医療効の「真髄」でもある。これまで取り組んできた「温熱療法」の正しい理解とさらなる発展のために、今後は「和温療法：Waon Therapy」と命名して普及させたい（Journal of Cardiology 2007;49:301-4）。

果/コスト）を高める治療は、医療を受ける側にとって安全で安心できるものでなければならない。患者の立場を深く理解して医療を提供することは医療従事者の重要な視点である。

しかしながら難治性疾患を有する患者の内面の苦悩や葛藤がどれほど深刻であるかは知る由もない。病気からの回復に役立つ検査や治療であれば、患者はいかなる苦痛を伴うものでも受け入れる。20世紀に飛躍的に進歩した様々な治療法、たとえば外科手術・放射線治療・化学療法・移植療法は、いずれも患者の心身にかなりの苦痛と我慢を強いるものである。にもかかわらず患者がこれらの治療を受け入れる理由は、病気からの回復を強く期待し念願しているからである。患者に与える痛み・緊張・ストレスがどれほど大きいかは、同じ病に苦しまない限り理解することは不可能である。難治性疾患患者が最先端の医療設備を完備した病院に入院して治療を受けたとしても、入院中に心地よい気分になり爽快な汗をかく機会など皆無である。

筆者が平成元年から取り組んできた「温熱療法」は、心身を和ませる・ぬくもり療法である。したがって「温熱療法」を「和温療法」と命名すると、「癌に対する高温での局所療法」などと明確に区別できて理解しやすい。「和温：Waon」は筆者の造語であるが、「和温」の二文字は訓読みで「なごむ・ぬくもり」で、「心地よく心身をリフレッシュさせるぬくもり」の意味がある。すなわち「和温」は筆者がこれまで18年間の歳月をかけて確立してきた「温熱療法」化症、慢性疲労症候群、繊維筋痛症、膠原病など多彩である。その効果発現には遺伝子レベル、分子レベル、細胞レベルで深く関与し、生体の回復に重要な役割を演ずる。

「和温療法」は、心身を和ませる温度で全身を温め、深部体温を約1.0℃～1.2℃上昇させた後、さらに安楽ベッドで30分間の安静保温により和温効果を持続させ、終了時に発汗に見合う水分を補給する治療法である。この「和温療法」の臨床応用は慢性心不全、閉塞性動脈硬

「和温療法」は安全で副作用が無く、対費用効果に優れ、患者を和ませる優しい治療法で、まさに医療価値（＝医療効果/コスト）を高める安全でかつ安心できる治療法である。「和温療法」が21世紀の革新的治療法として確立され、種々の難治性疾患患者を含めた多くの患者の福音となることを念願したい。

著者紹介

昭和48年 鹿児島大学医学部医学科卒業
49年 鹿児島大学医学部内科学第一講座
入局
50年 東京大学医学部研究生
(内科学第二講座)
55年 Senior Research Associate,
School of Medicine, UCLA
57年 Assistant Professor,
School of Medicine, UCLA
58年 鹿児島大学医学部助手
(内科学第一講座)
64年 鹿児島大学医学部講師
(リハビリテーション科)
平成 6年 Senior Visiting Scientist,
Mayo Clinic, USA
10年 鹿児島大学医学部教授
(内科学第一講座)
15年 鹿児島大学大学院教授
(循環器・呼吸器・代謝内科学)
(称 号)
1982年 Fellow of American College of
Cardiology (FACC)
1985年 International Fellow of
American Heart Association

1986年 Fellow of Japanese Society of
Circulation (FJSC)
1994年 Fellow of Japanese College of
Cardiology (FJCC)
2000年 Fellow of American Heart
Association (FAHA)
(受 賞)
Advanced Research Fellowship Award,
American Heart Association (1980年, 1981年)
Senior Investigator Award,
American Heart Association (1982年)
First Prize, Young Investigators Forum,
American Heart Association (1982年)
日本医師会研究助成賞 (平成3年)
日本心臓病学会賞(上田賞) (平成8年)
(学会関係)
日本循環器学会(理事)、日本心臓病学会(理事)
日本超音波学会(理事)
日本心エコー図学会(理事)
日本心臓リハビリテーション学会(理事)
日本温泉気候物理学会(理事)
日本循環器制御医学会(理事)
日本内科学会(評議員)、日本心臓財団(評議員)
日本老年病学会(評議員)
日本心臓病学会会誌 Journal of Cardiology の
Editor in Chief